

平成 29 年度（通算第 15 回）

国際交流推進協議会

平成 29 年 9 月 13 日（水）
アルカディア市ケ谷（私学会館 3F 「富士の間」

三. 活動報告

(1) 『量から質へ：1-6-1 留学プログラムのその後』

発表者

ASPIRE（学生団体）

【加藤氏】

参加者の皆さま、こんにちは。桜美林大学4年、加藤菜摘と申します。この場に立って、お話しできる機会をいただき、大変光栄に思います。失礼ではございますが、本日は、座っての発表とさせていただきます。また、本日の発表に向けて、準備、練習を重ねてきてまいりましたが、私を含め、緊張している子もいると思うので、温かい目で見ていただければと思います。

さて、ここからは、学生発表『量から質へ：1-6-1留学プログラムのその後』へと移行し、学生の視点から国際交流事業の一側面としての留学に関する発表をおこなっていきます。私のパートでは、本日の発表の概要を説明いたします。

まず、はじめに、ASPIRE Japanとは何かについてですが、これは、簡潔に言えば、国連と世界の高等教育機関を結び付けるプログラム、UNAIを母体とする学生組織ASPIREの日本支部です。ASPIREは、今回発表する留学プログラムの開発をはじめ、さまざまな活動をしています。最も大きな目標としては、持続可能な開発目標SDGsのような国連の推進する目標の達成のため大学生の立場からかかわっていくことです。

「1-6-1留学プログラム」は、昨年末に開催された日本私立大学創立70周年記念国際シンポジウムの学生セッションにて発表いたしました。その中で、私たちは、今後は留学の量的な側面だけでなく、質的な側面の充足も目指していくべきという問題意識のもと、留学の質を高める方策として提案したのが、「1-6-1留学プログラム」、通称「1-6-1」でした。

では、最後に、今回の発表の流れについて説明させていただきます。

まず、昨年の発表の振り返りとして、発表内容、学生がとらえた留学プログラムの課題と、その改善策として提案した1-6-1について振り返ります。

つぎに、昨年は、1-6-1のコンセプトとフレームワークのみを提示しておりましたので、今回は、1-6-1を実際に利用した場合、その中身は、どのようなものになるのか、こちらで考えた結果を1-6-1の利用サンプルの1つとして提示します。

そして、最後に、総括をおこなったうえで発表を終えたいと思います。

今回の協議会のテーマは、「国際交流事業の現況と展望」ということで、国際交流事業の一側面としての留学、留学プログラムの現況に対し、利用者としての学生が、どのような問題意識を持ち、また、その問題に対して、どのような解決策が必要であるかと考えているのか注目していただければと思います。

私からの説明は、これで、以上となります。

【飛澤氏】

ここからは、桜美林大学1年、飛澤結海が、昨年の発表を振り返りつつ、本日の発表の主題である、「1-6-1留学プログラム」の基本的なことを説明いたします。

まず、課題の部分を説明するにあたって、昨年、シンポジウムに先駆けて実施したアンケート調査の概要と、その結果の一部を紹介します。

本調査では、短期海外留学経験を持つ学生を対象に、留学理由、留学に対する満足度や後悔等、約20項目の質問をおこないました。

調査の結果、留学プログラムならびに、留学経験全体に対する回答者の満足度は、少なからず満足している回答者が全体の90%超ということで、非常に高いことが分かりました。しかし、その一方で、留学に関する後悔の有無を聞く質問に目を向けると、全体の84%、大半の回答者が何かしらの後悔を抱えていることが分かりました。後悔の内容の多くは、留学先の文化や言語に関する学習の不十分さ、積極性の不十分さに関するものでした。アンケート調査により、高い満足度の陰に多くの後悔があることが明らかになり、留学プログラムに改善の余地があるのではないかと考えました。また、国内の留学の議論は、留学生の受け入れと送り出しの数の増加に関することが多く、留学生の質に関する部分では着目されていないということが分かりました。留学生の数の増加も重要ですが、その内容がともなわなければ、あまり意味はありません。

1-6-1 留学プログラムは、留学の質を向上させるために考えたものです。1-6-1は、挑戦と後悔のための約1カ月間の留学。内省と学習の約6カ月。つまり、1学期間再挑戦のための約1カ月間の再留学の3段階で構成されるプログラムです。

まず、1カ月間の留学の中で、さまざまなことを経験し、その中で生じる失敗や後悔などの経験とともに一度帰国します。内省の6カ月では、1学期間、通常通りの学生生活を送りますが、必ず、内省として、最初の留学を振り返り、自分が何を経験し、何に後悔を感じているのか。また、再挑戦の1カ月に向けて、何をすべきなのかを考えます。この内省を踏まえたうえで、1学期間、再留学に向けた学習や準備を始めます。再挑戦の1カ月では、1学期間の学習を生かしつつ、最初の留学で生じた後悔などの払拭を目指します。また、はじめの1カ月間の留学と、1学期間の学習を得て再挑戦することによって、たとえば、留学先の文化をより深く考えられるようになるなど、ある種の成長も期待できると考えています。1-6-1では、このような内省、学習、再挑戦の機会の提供をとおして、留学者に成長や、より充実した機会を与え、質の高い留学の実現を目指します。

今回の発表では、「1-6-1 留学プログラム」を理解するために、そのサンプル例も作成しています。

【伊藤氏】

ここからは、麗澤大学2年、伊藤良美が、ユーザーモデルを用いたシミュレーションをとおして、1-6-1の利用サンプルの提示をおこないます。

1-6-1 全体の流れは、先ほど紹介したとおりです。

今回は、実現性を高めるために具体的なユーザーモデルを設定しました。1-6-1のユーザーモデルは、以下のようにします。

Iさん、某大学外国学部1年生。教職課程を履修中です。Iさんは、経済的余裕はありませんが、留学に行きたいと思っており、学びたいという意識はありますが、具体的な取り組み方が分からず、悩んでいます。

このプログラムの前には、事前準備と決起大会、壮行会をおこない、個人で目標を設定します。1度目の留学は、1年次の春休みに、某ASEAN加盟国で4週間ホームステイをします。ホームステイをすることにより、異文化体験をすることができます。このプログラムの利用人数は、約10名とし、それぞれ留学中、毎日行動記録を付けます。内容は、右の表のとおりです。

留学1週目。まず、留学先の学校でオリエンテーション、ウェルカムパーティーがおこなわれ、語学の授業が始まり、週末には観光にいきます。具体的にオリエンテーションでは、英語を全て聞くことに必死になってしまい、授業に関することなどの重要事項は聞き取れないという後悔が生まれました。そして、ウェルカムパーティーでは、多くの人に積極的に話し掛けることができない。せっかく話し掛けてもらっても、話題についていけない。授業では、自ら積極的に発言ができず、自分の積極性のなさを痛感します。さらに、ここでは、ホームステイも始まりますが、ホストファミリーに自分の気持ちがうまく伝えられず、自分の英語力の低さも痛感します。

留学2週目。2週目からは、授業だけでなく、ボランティアにも参加します。ボランティアは、人によって内容は異なります。Iさんは、教職課程を履修していることもあり、教育関連のボランティアに参加しています。Iさんが参加しているボランティアでは、小学生に向けた日本文化の授業で、教師アシスタントをするというボランティアです。これを、1日5時間、2回おこないます。ここでは、授業見学となりますが、生徒に何か質問されたら答えたり、プリントの配布などをするアシスタントとして参加します。その際に、小学生に質問されたことに答えられない。先生の指示が理解できないなどの経験をします。

週末には観光、現地の学生と交流をします。そして、ここで、Iさんは、日本の文化について質問されたにもかかわらず、知識不足で答えられない。相手国についても知識が少なく、会話が弾まない。せっかく現地の学生と交流できる機会であるにもかかわらず、積極性が足りないために話し掛けることができませんでした。

留学3週目。授業は変わらずに受けますが、ボランティアでは、Iさんが、実際に日本文化教師として授業をおこないます。留学2週目で見学して学んだことを取り入れ、自ら授業内容を考え、日本文化を教えます。しかし、ここでも、伝えたいことがうまく伝えられない。急な質問に答えられない。クラスマネジメントができないなどの後悔をします。

そして、週末には伝統文化体験をし、相手国の料理を一緒につくったり、民族音楽、衣装を体験したりしますが、ここでも、Iさんは、日本の文化について聞かれたことに答えることができませんでした。

留学4週目。最終週では、語学の授業ではなく、学部の授業に参加します。学部の授業では、専門用語が分からず、授業についていけなくなってしまいます。週末には観光、伝統文化体験、帰国前には、現地の学生との交流をおこないますが、ここでも、日本について質問されても、うまく説明できず、日本について、もっと学ぶべきであったと後悔をします。

【尾張氏】

ここからは、創価大学4年、尾張智華子が担当します。

内省の6カ月は、2年次の春学期を想定して、1セメスターにわたる授業をおこないます。また、メンター制度を設けることにより、既参加者からのサポートが受けられる体制を整えます。加えて、TOEIC等の受験を推奨することで、語学面での成長を数値で見えるようにし、自分のレベルより高い語学授業の履修を条件として設けました。

それでは、授業内容について説明します。

概要は、このようになっています。大きく分けて、内省回・講義回・発表回・教授回と

なっています。また、毎回の授業において、1週間の振り返りをおこない、記録することで、さらなる成長へとつなげます。

1回目の授業では、自己分析をおこない、留学中の後悔や改善点を洗い出します。それをクラスで共有することで、ほかの人から改善に向けたアドバイスをもらうことができ、自分では、気づけなかったことに気づくことができます。その後、この6カ月と次回留学への目標設定をおこないます。

2回目、3回目では、留学先の国について、より深く理解するため、教授による講義を展開します。これにより、日本と相手国の関係について学習します。また、日本のことについて教えられなかったとの後悔から、日本について、歴史・経済等、さまざまな観点から学びます。

4回目から8回目にかけては、プレゼンテーションとディスカッションをおこないます。1回の授業で2人が発表し、合計5回で10人全員が発表します。1人が、自分で設定したテーマについてプレゼンテーションをおこない、それについて全員でディスカッションをします。Iさんの場合、日本の文化を知らなかったという後悔があったため、日本の食文化について調べ、発表しました。

この一連の流れにより、調査力、表現力、思考力の向上が図られます。また、ディスカッションをとおして、積極的に発言する癖を身に付けられるようにします。また、教授からのフィードバックを受けることにより、質の高い成長を目指します。

9回目には、実践的なものを取り込み、実際に、日本文化について、留学生に伝える時間を設けます。日本文化を知らなかったという後悔に対し、具体的に何を知らなかったのかを考え、それについて調べ、留学生に教えます。これにより英語で伝えることの練習が可能になり、2回目の留学に向けた準備をすることができます。

たとえば、Iさんは、「浴衣の着付け方を聞かれたが、分からず、何も教えられなかった」との後悔がありました。そこで、知人に着付け方を教わり、浴衣を着てみたいという留学生に着付け方を教えます。

10回目から14回目では、再び、プレゼンテーションとディスカッションをおこないます。2回おこなう理由として、前回の反省点を生かし、できなかったことをできるようにするという目的があります。

15回目は自己分析と目標設定です。毎回の授業で記録した1週間の振り返りを基に、6カ月を振り返り、後悔とできるようになったことを分析し、その結果をクラスで共有します。これを踏まえ、次の留学の目標を再設定し、さらなる成長へ向けた準備を整えます。

2度目の留学は、2年次の夏休みで、留学先・期間・人数・滞在方法は、1度目の留学と変わりません。内容は、Iさんが自国で学んだ成果が明確に見られるよう、基本的には、1度目と同じですが、自国で学んだことを生かし、前回の後悔を払拭できるよう一部変更します。たとえば、1度目の留学での伝統文化体験や交流は、相手国の方に教わったので、今度は、Iさんたち日本人が日本文化を紹介します。このように、6で学び、身に付けたことを生かし、実践することでレベルアップを図ります。

そして、プログラム終了後には、報告会と次期生の決起大会をおこないます。また、冒頭に述べたメンター制度ですが、それぞれのイベントが重なるようになっていきます。たとえば、1期生の報告会を3期生の決起大会と併せておこなうことで、1-6-1の既参加

者と次期生の情報共有の場となり、3期生の不安解消やモチベーションの向上につながる交流の場になります。加えて、1期生の2度目の留学が、2期生の1度目の留学と重なり、現地でのサポートが可能となります。これで、1-6-1の1つのサイクルが終了します。

【秦氏】

ここからは、本日の総括としまして、麗澤大学2年の秦が発表いたします。

本日は、次の3点について説明させていただきました。1点目に、「課題としての現状に関して」、2点目に「1-6-1の概要に関して」、3点目に「1-6-1の利用サンプルに関して」といった内容です。

まず、はじめに、課題としての現状に関してですが、留学に対する高い満足度の陰に、多くの後悔が見られたことがアンケートを通じて明らかになりました。既存プログラムは量的側面を重視する傾向があり、質的な側面の充足に関心が寄せられていない現状があるのではないかという認識に至りました。

そこで、私たちASPIREは、「量から質へ」をテーマに、留学プログラムを説明いたしました。その「1-6-1留学プログラム」の具体的な内容が、こちらになります。

はじめの1カ月で後悔を経験します。次の6カ月間は、これらの後悔を払拭する準備期間となります。最後の1カ月で、再度、留学をおこない、前回できなかったことに再び挑む再挑戦の1カ月となります。

以上が、「1-6-1留学プログラム」のおおまかな流れとなります。

つぎに、より実現性を高めるために、さらに具体的にした利用サンプルを提示いたしました。全体の流れが、こちらになります。

前回の提言では、「1-6-1留学プログラム」のフレームワークのみの発表でしたが、今回は、新たに利用サンプルの例を示しました。この利用サンプルでは、学生が実際に経験した後悔の内容を取り入れています。

以上が、本日、ASPIREが提言いたしましたプログラムの大きな内容の振り返りとなります。あらためて、私たちASPIREは、「1-6-1留学プログラム」を用いることで、学生が、より質の高い留学をすることができると考えております。

国際交流事業の現況と展望を鑑みの中で、私たちASPIREから、質の高い留学の観点から「1-6-1留学プログラム」の提案をいたしました。さらなる国際化を推進する1つの案としてご検討くださいますと幸いです。グローバル人材の育成のためにも、この「1-6-1留学プログラム」を活用してみたいかがでしょうか。

発表は以上になります。本日はありがとうございました。

(以上)